

プロローグ

私の長女、山口真帆は2005(平成17)年2月13日、急性リンパ性白血病で亡くなりました。生を受けてからわずか26年と半年。思いがけない病気にとらわれてから、3年11カ月の闘病生活の後に、この世を去らなければなりませんでした。

白血病を発病した2001年3月末は、22歳の真帆が大学を卒業し、就職も決まって社会人として羽ばたこうと準備をしている矢先でした。

いきなりの入院。5カ月にわたる抗がん剤治療。人生の進路が大きく変わり、描いていた夢が崩れていくという事態のなかで、真帆が辛く厳しい治療を耐えぬくことができたのは、どんなことがあっても希望を捨てず、自分が「いまできる最善のことは何か」という思いをいつも心の中にいだいていたからではないかと思います。

最初の抗がん剤治療をうけると、病院の方針は「本人に告知をしてからでなければ治療は開始できない」というものでした。激しい副作用をともなう辛い治療なので、病気に打ち克つという本人の意志がなければ乗り越えられないという理由からだと思います。

しかし、私も夫も、真帆の2歳年下の妹である美希も、「本人にはまだ病名を告げないでほしい」という考えでした。

急性リンパ性白血病を治療するためには、「骨髄移植」を受けるしかありません。しかし、その骨髄を提供してくれるドナーさんが現われるかどうかは、わからないとお医者さんにいわれました。家族のなかに白血球の型が完全に一致する者がいなかった真帆は、骨髄バンクを通じてドナーさんが現われてくれるのを待つしかなかったのです。

治る方法は骨髄移植しかない。しかし、そのための骨髄を提供してくれるドナーさんが、現われ出てくれるかどうか分からない。そのようにはっきりとしない状態で「急性リンパ性白血病」という病名を告知され、抗がん剤治療に耐えることがはたして真帆にできるでしょうか。

私たち家族は、それならばむしろ、病名を隠して「必ず治る」と励まし、抗がん剤治療に耐えさせたほうがよいのではないか。本当の病名の告知は、ドナーさんが見つかって骨髄移植への道が開けたときにしてもらえばよいのではないか、と考えたのです。

主治医の先生は私たちの意をくみとってください、告知をしないまま抗がん剤治療を進めてくださいました。そして、5カ月にわたる治療が終わりにさしかかったころ、骨髄バンクからドナーさんが見つかったと知らせがきました。その段階で、真帆は初めて告知を受けました。

「血液のガン」ともいわれる急性リンパ性白血病という本当の病名の告知も、骨髄移植にともなう筆舌に尽くしがたい苦しみも、真帆にとってはどれほど辛いものだったかわかりません。けれども、それらはすべて、病気の克服という「希望」に結びつく苦難です。

この治療を受ければ、私は病気から解放されてまた新しい人生を歩み始めることができる。真帆はそう心の中で自分に言い聞かせ、長い治療を耐えぬいたことでしょう。

実際、骨髄移植を受けた2002年4月26日の日記に、真帆は「私は生まれ変わった」という記述を書き残しています。ドナーさんから「命の水」をいただいたことで、命の大切さをあらためてかみしめ、実感した。これからの自分は、いままでよりもっとしっかりと生きて、人の役にたてるような人間になっていかなければ……。新しい決意ともいえる思いを胸に、真帆は退院しました。

しかし、真帆にとっての試練は、それで終わりではありませんでした。骨髄移植で克服したと思っていた「急性リンパ性白血病」という病魔は、真帆のからだから消え去ってくれてはいなかったのです。

移植からほぼ1年がたった2003年5月初め、真帆は主治医から「再発」を告げられます。その4カ月後の9月には、白血球の型がひとつと違っている父親から骨髄の提供を受けて2度目の移植を受けなければなりませんでした。

病院のベッド、無菌室、自宅を行ったり来たりする生活のなかで、真帆は何を考え続けたのでしょうか。ひとつだけはっきりといえることは、真帆が最後まで自分の未来に希望を捨てなかったこと。そして、たとえどんな状態にあっても、いま現在を「自分らしく生きぬいた」ことでした。

移植を受けるための抗がん剤治療の最中であっても、真帆は体調がよくなると外出の許可をいただき、友だちと会ったり好きなショッピングを楽しんだりしました。白血病の患者会などにも積極的に出かけていきました。

たとえ病院のベッドの上から離れられないときでも、妹への誕生日プレゼントを手作りで用意したり、私や父親へのプレゼントを妹に買ってきてもらったり。人を喜ばせるために自分ができようことを考え、実行し続けたのです。

その真帆の生きるための姿勢は、2004年4月に再々発を告げられてからも変わりはありませんでした。

幸いだったのは、入院中の主治医の先生が真帆の気持ちを大変よく理解してくださる方で、可能な限り真帆の要望を実現するようにご尽力くださったことでした。そうしたご配慮が、どれほど真帆の力になったことかしれません。

再々発を告げられたあとの2004年6月末ごろから、真帆はほとんどの先生が見放さざるをえないほど、体調が悪化していきました。ところが、強く希望して主治医の先生のいる病院に戻ると、みんなが驚くほどの快復を見せていきました。

それからの8カ月間を、私は「奇跡の8カ月」と呼んでいます。現実にはこの間に、真帆の体調はしだいに思わしくなくなっていくます。けれども、いま自分は何をしなければならぬのか、何をしたいのか、そして、どう生きていきたいのか。その思いを貫き通した真帆は、奇跡のように輝いて生きていたと思えるのです。

3年11カ月の闘病生活にもかかわらず、この世を去らなければならなかった真帆。

最期のときが近づくなかで、真帆ははっきりとこういう言葉を口にしました。

「病気になったおかげで、真帆はもらうものがいっぱいあった。幸せって何かを、感じることができた」と。

亡くなった真帆を送る通夜と告別式には、500人を超えるほど多くの人が参列してくださいました。こうした席に慣れている方々でさえ、「こんなに参列者が多いのは、著名人の葬儀ぐらいでしか見たことがない」と驚くほどの人数でした。

まだ26歳にしかならない真帆の葬儀に、なぜこれほど多くの方々が集まってくださったのか。おそらくその理由は、急性リンパ性白血病との辛い闘病生活のなかでも真帆が「自分らしさ」を失わず、最期まで前向きに生きぬいたことではないでしょうか。そして、病気になることで知った命の大切さ、健康の大切さを、お見舞いにこられるすべての方々に真帆がいつも語りかけていたことではないかと思います。

真帆は天国に旅立ってしまいました。それでも、真帆がこの世に残していったくれたものは、けっして小さなものではない。絶えることのないほどの葬儀の列を目にしながら、私は漠然と考えていました。

真帆の書き記した多くの闘病日記や手紙とともに、残していったくれたメッセージを何かの形にして多くの方々にお届けすることができたら。この本は私たち家族のそうした思いを込めて、真帆が生きた26年半の人生をありのままにつづった記録です。